

「奉轉讀大般若經六百部武運長久処」祈禱札付着の紙片について

安部己図枝

日本の紙は年号の記載がない場合、現段階では抄造された年代は特定できない。また、抄紙された場所も、紙を見ただけでは判別できない。和紙の原料の雁皮・楮・三桮の皮から採れる靱皮繊維だけでできた和紙は1000年経過したものも、数年前のものも判別しかねるほど保存性・耐久性がある。しかし、分析や発見状況から推定できることはいくつかある。

将来、紙の繊維分析が、繊維の生育場所や年代までも判別できるようになれば、もっと歴史の一端を紐解くことも出来るのではと、化学に期待がかかる。

今回、松江城創建に関わる祈禱札（「奉轉讀大般若經六百部武運長久処」祈禱札）の裏側に、ほんの数センチ角の紙が糊付けされて残っており、繊維の分析を高知県立紙産業技術センターに依頼した。

結果は「三桮と木材パルプ」であった。これは紙の成り立つ繊維の分析である。

紙を直接見て言えることは、手漉きによる和紙の可能性が高い。繊維が長く、紙は薄く透けるようで、しかも柔らかく生成り色をしている。紙の腰が柔らかいのは、木材パルプを混入し、パルプの劣化により紙が弱っているため、色は酸化による変色であろう。繊維の流れは均一で、熟練した職人によるもので、さぞ美しい紙であったことと思われる。

しかし分析結果から、三桮に針葉樹の木材パルプが1～2割程度含まれていて、この紙は間違いなく近代の紙であることが分かった。そして表面に付着していた樹脂は、松脂などを精製し、印刷や書画用紙としての滲み止め剤として使われ、紙の表面性を改善するサイズと呼ばれていたものである。

木材パルプが日本で使われるようになったのは、明治22年（1889）以降で、機械製紙が始まったからである。そして、機械製紙の発達はめざましく、それに伴い手漉き和紙が、衰退の一途を辿ったのは周知のごとくである。

今回の調査で、安部榮四郎が生前言った「パルプを混ぜる実験をよくやった」ことを思い出し調べているうち、安部榮四郎が島根県工業試験場紙業部において、技師の助手を勤めていた頃（大正12年～昭和13年）の見本紙を見つけた。パルプ混入の実験記録である。偶然とは言え、島根県の紙業史の貴重な記録である。島根県で、木材パルプを使用始めたのは、大正12年（1923）頃とあり、今回のパルプ混入の紙の解明について大いに役立った。

安部榮四郎の著書『紙漉き50年』によると、出雲地方では、明治時代に入り、松江藩の専売特許と言える御紙屋（おかみや）制度から自由になり、御紙屋だった野白（松江市）、広瀬（安来市）など大いに発達を遂げたようである。野白では明治中頃が全盛期で、全集落の7割5分の專業者60戸、手伝いの女工200名余りと記録がある。しかしその後、全国的にも言えるが、機械と対抗し量産するため、粗悪な原料を使い、品質が低下し信用を失い廃業していくものが多く出たとある。

島根県の調査によると、大正初期、県内の製紙戸数は2,888戸あったが、昭和2年（1927）の調査では、1,295戸と半減している。

そしてさらに、昭和19年の記録に残っている出雲部の紙業家は、野白2名、岩坂（八雲町）22名、広瀬27名（祖父谷6名、布部3名、山佐18名）である。この当時、いかに手漉き和紙業が衰退していったかが分かる。

その期間、島根県は、明治27年（1894）、指導者育成を始め、器具・道具を改良し技術の進歩を図っ

ている。明治44年（1911）には工業技師をおき製紙伝習所を開所、大正10年（1921）には島根県工業試験場を設置、技師を招き和紙業の再興を試みている。

そして先に述べたが、大正12年（1923）より、まだまだ絶対数を誇る手漉き和紙業者を救うべく、また和紙の原料・三極の不足を補うため、木材パルプの混入を実験したのである。

安部榮四郎が当時工業試験場で、技師の助手として抄紙し、パルプの配合実験を行ったのである。見本紙には、1割から5割のパルプ配合の紙があった。この抄紙法は、昭和4年（1929）頃から県内で指導者講習会を開き、多くの指導員を排出し、昭和8年（1933）には石見部の三隅町に工業試験場分室ができたほどである。

そのような背景を考えて、「奉轉讀大般若經六百部武運長久処」祈祷札の裏側に付着した紙は、

- ① 手漉き和紙と思える。薄い和紙ゆえ祈祷札を包むのではなく、何かを記して貼り付けていたのではないかと考えられる。
- ② 木材パルプの混入割合が少なく、サイズ（滲み止め）を施した紙である。
- ③ 特にパルプに関して言えば、第2次世界大戦前までは国外針葉樹が中心だったが、戦後は国外の針葉樹が入手しにくくなり、国内の広葉樹からもパルプを作っていた。
- ④ 島根県出雲地方でこれだけ盛んに、紙産業が発達していたことを考えると、今回の紙が地元産であると仮定して良いのではないかと考える。

上記の事実から、この紙が抄造された年代は大正12年から昭和初期頃と思われる。

参考資料

久米康生『紙文化辞典』（株）わがみ堂 1995

安部榮四郎『紙漉き50年』東峰出版株式会社 1963

太田柿葉『出雲民芸紙の由来』島根民芸会岩坂支部 1945



平成24年 7月26日

安部榮四郎記念館 様

高知県立紙産業技術センター所長 関 正純 様

高紙第216号

計1種

計2項目

成績報告書

1 受付の年月日及び番号 平成24年 7月12日

2 供試品の名称、種類等 松江城折漉札

3 依頼を受けた事項 繊維組成、顕微鏡写真

上記の事項に対して行った 試験 の成績は、次のとおりです。

記

○繊維組成試験 (JIS P 8120による)

松江城折漉札 みつまた繊維と木材ハルプの混合

以下 余白 ○の顕微鏡写真は別添

※上記の成績は、依頼者が供試した検体について試験を行った結果です。



顕微鏡写真×100 長い繊維はみつまた、短い繊維は木材繊維